

## 第3回埼玉県総合教育会議議事録

### 1 開会、閉会の年月日及び時刻

平成27年9月11日（金） 午後1時30分開会  
午後3時30分閉会

### 2 会議開催の場所

知事公館 大会議室

### 3 出席した会議の構成員の氏名

○上田清司知事

○埼玉県教育委員会

高木康夫委員長、吉田敬岳委員長職務代理者、藤崎育子委員長職務代理者  
志賀周子委員、門井由之委員、関根郁夫教育長

### 4 構成員以外の出席した者の氏名

○有識者

津田塾大学 学芸学部国際関係学科 教授 萱野稔人

○知事部局の出席者

伊東弘道総合調整幹、畠山真一総合調整幹、関口圭市総合調整幹付主幹、  
長嶋健一秘書課主幹

五味浩報道長付主査

○教育局の出席者

櫻井郁夫副教育長、柚木博教育総務部長、古川治夫県立学校部長

安原輝彦市町村支援部長、塩野谷孝志教育総務部副部長、高田直芳県立学校部副部長

小澤健史県立学校部副部長、松本浩市町村支援部副部長、吉田正市町村支援部副部長

佐藤裕之総務課長、大根田頼尚教育政策課長、佐藤卓史魅力ある高校づくり課長、

栗原正則総務課報道幹、飯村光良教育政策課副課長、阿部正浩教育政策課副課長、

今井久典教育政策課主幹、佐藤直樹教育政策課主幹

## 5 会議に付議した事項

### (1) 有識者との意見交換

ア 講話

イ 有識者を交えての意見交換

### (2) 埼玉教育の針路

## 6 発言の趣旨及び発言者の氏名

○関根教育長 それでは、ただいまから第3回埼玉県総合教育会議を開催いたします。

本日は、傍聴の申し込みがございますので、ここで傍聴人に入場していただきます。よろしくお祈いします。

〔傍聴人入場〕

○関根教育長 はじめに、本日の会議には、有識者として御意見をいただくため、津田塾大学学芸学部国際関係学科、萱野稔人教授をお招きしておりますので、私から御紹介をさせていただきます。

萱野教授の御専門は哲学と社会理論となります。

御出身は愛知県で、早稲田大学を卒業後、1995年にフランスに渡られ、2003年にパリ第十大学大学院哲学科博士課程を修了され、哲学の博士の学位を取得されております。

帰国後、東京大学COE「共生のための国際哲学研究センター」研究員を経て、2007年から津田塾大学准教授、2013年から同大学教授となっております。

また、現在、国の諮問機関である「衆議院選挙制度に関する調査会」委員などを務めていらっしゃいます。

主な著書といたしまして、「国家とはなにか」、「新・現代思想講義 ナショナリズムは悪なのか」、共著として「超マクロ展望 世界経済の真実」、「没落する文明」、編書に「現在知V o 1. 2 日本とは何か」など多数がございます。

本日は、まさに御多忙の中、御出席をいただきました。どうぞよろしくお祈いいたします。

○萱野教授 お願いします。

○関根教育長 次に、本日の会議の進行についてでございますが、議事(1)有識者との意見交換といたしまして、はじめに、萱野教授から講話をいただきました後に、萱野教授を交えて意見交換を行います。

次に、5分程度の休憩を挟みまして、議事（2）埼玉教育の針路をテーマにして、第2回会議に引き続きまして意見交換を行いたいと思います。

それでは、議事の進行につきまして、上田知事をお願いいたします。よろしくお願いいたします。

○上田知事 改めて萱野教授、お忙しい中、御出席いただきましてありがとうございます。

この総合教育会議では、ざっくばらんに有識者の意見も聞き、なおかつ少し意見交換もさせていただいた後に、本県が抱える教育の課題についても、そうした意見を踏まえて内容を高めていこうという趣旨でこうした会議を行っているところでございます。今日は忌憚のない形で、少し楽にお話をいただければ大変ありがたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

## 議 事

### （1）有識者との意見交換

#### ア 講 和

津田塾大学 学芸学部国際関係学科 教授 萱野稔人 氏

○萱野教授 津田塾大学の萱野と申します。よろしくお願いいたします。

今日は、このような意見交換の場をいただきありがとうございます。

私も大学で教員として日頃教育に携わっていますので、こういった形で教育に関して意見交換できる機会を与えていただいたということで非常にうれしく思っております。ぜひ実りある会議の場にしたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

気軽にと知事からもおっしゃっていただきましたので、気軽に、かつ忌憚のない議論の場にしたいなと思います。

今日、私がお話したいなと思っているのは、グローバル化という時代だと最近言われていて、よくグローバル化に応じた人材育成が必要だということが言われておりますが、グローバル化における教育とはどういうことなのかということを少しお話したいと思います。

グローバル化というと大体は語学力、特に英語力を付けろということと、あと多様性を受け入れられるような人を育てろという、この2つの柱が一般的に言われることかなと思うのですが、私自身がこれまで経験して、あるいは教育の場で実践してきたことを振り返ると、もっと大事なことが1つあるのではないかと感じておまして、その部分を

お話できればと思います。

まず最初に私のエピソードをお話したいと思います。

私は先ほど御紹介にありましたように、1995年、25歳のときにフランスに留学しました。最終的には博士課程まで進学して8年間いたのですが、その間に、私も家のほうは裕福ではありませんでしたので、向こうでアルバイトをしていたのです。そのアルバイトというのは、いろんなアルバイトがありましたけれども、通訳の仕事というのが時々ありました。通訳、なかなか学生としては報酬もよかったですので、できるだけやろうとしていたのですが、実際に通訳の仕事はかなり大変、やってみてわかったのですが、相当大変なんですね。何が大変かというと、語学力ではないのです。もちろん語学力がなければいけませんけれども、語学力では対応できないことがたくさんあるというのが実は通訳の大変なところなんです。

例えば私はフランスの通訳の仕事で、フランスはまだ国鉄です。民営化されていませんので、国鉄から仕事を受けたことがあるのです。どんな仕事かというと、線路を補修する機械をフランスの国鉄が日本の企業から買った。その機械の調子があんまりよくないので、その売った側の日本のメーカーの技術者がフランスに来て様子を見てもらうので、その通訳をしてほしいという仕事だったのです。私はお受けして、集合したのですが、最初、技術者が来て、フランスの国鉄の技術者が来てお話をして現地まで行きました。その間は全く問題ないのです。昨日よく眠れましたかとか、フランスは初めてですかとか会話を通訳していればよかったので問題ないのですが、いざ現場に行くと機械を見ながら話をすると、結局全く私の仕事が役に立たなかったのです。というのも専門的過ぎたのです。結局機械の話ですから、日本語で言っていることすらわからないのです。通訳はよくこういうことがありますので、私もかなり何日か前に資料をいただいて、専門用語等々を勉強したつもりなんですけれども、全然役に立ちませんでした。

最終的には、私のフランス語でよく通訳ができないということで、本人たち、技術者同士ですから、あんまり語学は得意でない、本当に片言の多分日本人の技術者は海外旅行に行けば、サバイバル英語ぐらいのレベルなんですね。でも片言でやり始めたのです。簡単な英語なんですけれども、そっちのほうに通じたのです。明らかにというのはちょっと僥越かもしれませんが、私のフランス語のほうがお互いの英語よりできたのです。できたにもかかわらず、専門知識を知っている人たちのほうが意思疎通がうまくいくのです。これは結局語学ではないだろうということをそのときにもものすごく痛感しました。

実際に通訳の仕事というのは、語学力というのは半分ぐらいしか必要ないですね。その都度、その都度、専門分野があって、必ずありますから、ガイド通訳のようなものだったらまだいいですけども、それでも観光ガイドするためにはいろんな知識が必要になります。そうでないビジネスの場合での通訳というのはほとんどが専門的なお話ですから、もう語学だけでは対応できないのです。一般的には1週間ぐらい前に資料がどさっと送られてきて、その資料を調べて、どういうビジネス、今回の通訳の内容はなんだということを調べてやるのですけれども、ほとんどが語学以外の勉強なんです。語学以外の勉強で対応するのですが、その時は、それでも準備したつもりでも対応できなかったのです。

私がある時に思ったのは、グローバル化といったときに、本当に大事なものは何だろうなということなんです。語学は確かに大事だけれども、語学だけでは実際、どこまでグローバル化に対応できるかというのは、ちょっと心もとないところがあるんですね。

実際にフランスで大体私がいた当時、90年代後半というのは、3万人ぐらい日本人が住んでいました。基本的に旅行以外の形で長期滞在、あるいは永住という形で住んでいるのが大体3万人ぐらいフランスにいたのですけれども、ほとんどの方が、語学ができるから仕事にありつけている人はいないのです。もちろん3万人いる中で、よりいい仕事に就いているのは、例えば語学がちゃんとできる人なんですけれども、現実としては、大部分の人たちが日本の企業の現地採用で仕事をしているのです。私はよく例えば若い世代から、今の日本は望みがないので外国に永住したほうがいいですかというような質問を聞くのですけれども、ふたを開けてみると、外国に住んだ人の9割以上は日本から来るお金のもとで生活しているのです。

語学はもちろんできたほうがいいのですけれども、語学ができるだけでは仕事は全く広がりません。例えば現地で日本からのお金と関係なく、どんな人が日本人でビジネスというか、仕事をしてきたかというのを見てみると、まずは料理人です。これは現地の人相手にできます。あとはフランスですからファッションのデザイナーなんかみたいで、高田賢三さんなんていうのは有名で、パリで最も成功した日本人と言われてはいますが、ああいったファッションの業界の人たち、それから、金融の人たちです。この方たちは日本からのお金、日本の企業、現地に支店や支社を出している日本の企業からのお金とは関係ないところで仕事できていました。でもこれは全部振り返ってみると、語学の比重は非常に低いのです。料理人は黙っていてもというのは言い過ぎですけども、語学を使わなくてもできる仕事です。それから、賢三さんもそうですね。ずっと長く住んでいますの

でフランス語は上手ですけれども、フランス語でごはんを食べているわけではありません。金融も語学を使う、それは英語ですけれども、比重は高いですが、でも金融の専門的な知識があるからこそ、向こうの例えばBNPパリバだとか、ソシエテ・ジェネラルといった金融機関に採用されて仕事ができているということです。語学はそれをあくまでも補強する手段なんですね。

要するにグローバル化で例えば生き残っていくときに、私たちはよく英語をやれ、やれということをおっしゃるけれども、英語だけでいても現実的には何も海外では食べることができません。日本からお金が落ちているときに、日本語ができるということが有利になって、日本語と英語ができる、日本語とフランス語ができるということがプラスになるだけで、それとは関係ないところで生きていこうと思ったら、語学以外のところで強みを発揮しないと生きていけないのですね。

これは日本経済全体にも言えると思います。日本経済に何か強いものがあるから海外に行って商売ができるわけで、英語ができるから商売ができているわけではないですね。この部分を結構多くの人が見落としとしていて、語学さえできればいいというような感覚に陥っているのです。最終的には語学を超えたもっと中身の部分が大事になると思うのですけれども、ではそれが何なのかということ突き詰めて考えていくと、もちろん技術力だということと言えます。それに関して言えば、技術力ということは言えるのですけれども、でも全員が技術者になるわけではない。さらに技術力の奥にあるものは何なのかということを考えていくと、結局これは広い言い方をすれば、言葉を運用する力、母語も含めてというか、特に母語なんですね。あらゆる技術や学問の知能、根本にある言葉を使う能力というものが必要になりますから、その部分がどこまで強いかということで日本の例えば経済力や技術力も決まってくるのです。

例えば外国語を学ぶ場合でも、母語の能力と外国語の能力はかなり比例するのです。母語の運用力が高くないと、実は外国語の運用力もそんなに高くないのです。人によって語学が自分がどれくらいできるかという自己認識はかなり違いますけれども、語学は自分ができると思っている人ほどというか、低い語学力で満足してしまう人ほど実は日本語の運用力もあんまり高くなかったりする。あるいは常に向上心を持って外国語力をどんどん高めようと思っている人ほど日本語の運用に関しても厳しい考えを持っていて、ちゃんと言葉を使おうとしている。そういう比例関係がかなり見てとれるのですね。あらゆる知を生み出す日本経済の源泉でもありますし、社会を豊かにする力でもありますけれども、あら

ゆる知を生み出している力というのは人間では言葉でしかないのですね。言葉がなければ技術力だってここまで上がりませんし、コミュニケーションが広がらなければ、技術もどんどん広がってきませんから、やはり言葉に対する運用力というものを高めなければいけないだろうなというのを私は痛感しております。語学力の前に母語の運用力をいかに高めるかというのが私は今後、グローバル化といわれる時代の中でも重要になってくると思います。

母語に対する運用力が高ければ、外国語習得は、発音とか正確でなくても実際は何とかなるのです。この話も長くなってしまいますけれども、発音にこだわればこだわるほど語学が伸びませんから、いろんな国の人たちがいろんなアクセント、なまりで英語なり、フランス語なりしゃべる中で、日本人だけきれいにしゃべる必要はありませんし、それにこだわっていると、みんな萎縮してしまってなかなかしゃべれないという状況が実際出てきますので、余りそういったのはこだわる必要がないと思います。それよりも母語の運用力がしっかりしていれば、その上にしっかりした語学力をつくることができるということです。

もう1点だけ、そういった留学の経験で、どうやって言葉、母語に対する運用力を高めていくべきなのかということで感じたことを1つお話したいと思うのですが、その点に関して言うと、日本人はアウトプットの力が非常に弱いのですね。インプットの力は非常に強いです。例えば高校までの入試というのは、基本的にインプットの能力を確かめる、そういう試験ですね。こちらがいろんな情報を与えて、正確にそれをちゃんと理解できているか。あるいは国語の授業でもいいですけども、ちゃんと内容を理解できているか。そういうことが中心になる試験です。大学以降に少しずつアウトプットする勉強をするようになるのですが、フランスに行って驚いたのは、小学校のときからアウトプットの授業をさせるのですね。どういうことかということ、論文を書かせているのです。小学校のころから。もう教え方のメソッドや、論文を書くときの形式からすべて決まっています、フランスの場合は。かなり形式化されていて、それを小学生から中、高、大という形で、進級していくたびに内容は高度にはなっていきますけれども、基本は変わらないのです。日本ではもちろん作文や読書感想文を書かせますけれども、論文とはまた違うのですね。時系列であなたどんなことをしましたか。それでどう感じましたとか、本を読んでどう思いましたかというような形で、どちらかということ心の育成に力が置かれているのですが、明らかにフランスでの国語教育というのは、自分でいかに論拠を組み立てて、

論理的な一貫性のもとで自分で議論をできるかという能力を養うような教育をしているのです。アウトプットをしっかりとできるようになるということがフランスでの国語教育の中心事項にあるのですね。それを見て私はちょっと日本にはない発想だなと思いました。

これを痛感したのは、やはり国際的な会議の場で、どうしても日本はルールメイキングであったりとか、大きな問題に対して論拠を持って自分たちの主張に多くの人たちの味方をつけるといった、そういうところが弱いところがあるのですね。私たちはグローバル化ということを考えると、単にグローバル化というのは、物や、人や、お金が国境を越えて行き来することではなくて、国境を越えてルールがつくられることが本質ですから、そういう点でいうと、ルールをつくることのできる能力は非常に大事になると思います。

よく日本では技術で勝ってビジネスで負けるなんて言われ方をしますけれども、これは高い技術を持っていても、結局それを生かすためのルールづくりができませんので、いつも損をしてしまう、二輪車とか、F1のターボだとか、いろんところでよく日本でも騒がれたりしましたけれども、ルールメイキングが弱ければ、結局いい技術を持っていても、なかなかそれをビジネスで生かせないという場面が出てくるのですね。いかに私たちルールメイキングをすることができるか、それで自分たちに有利な形で国際的な秩序をつくっていくことができるかということが恐らくグローバル化の時代では一番問われることだと思います。そのためには、ルールをつくるためには、論拠を組み立てて、論理一貫性のもとで議論を展開する能力がなければいけない。これこそアウトプットの力なんですね。それはフランスでは実は小学校のころからやっているということで、何で6000万人のフランスで、大した経済力もないのに、国際的な場ではあんな大きい顔をしていられるのかというのが少しわかったような気もします。ただ議論が非常に上手なんですね。私たちも今後、グローバル化の時代では、アウトプットの力をどんどん磨かなければいけないだろうなと思います。そういった基本的な言語の運用力というものがあってはじめて外国語能力も花が咲くだろうなと認識しております。

ということでちょっと時間が過ぎましたけれども、一旦私の話はここで区切らせていただきます。ありがとうございます。

○上田知事 ありがとうございます。

#### イ 有識者を交えての意見交換

○上田知事 今、ある意味では、まさに人・物・金が動くのがグローバル社会だというふうな定義みたいなのが世の中で定着しているところですが、そうでなくて、ルールをつくる、そういうものを形成する力が実はグローバル化におけるいわば一つの人間なり、あるいはグループなり、国家なりの能力だ。こんなふうな定義を萱野先生からしていただきました。

自分の御意見も含めて、もう少しこういった論点から萱野先生の考え方などをお聞きしたいということも含めてそれぞれ御意見をいただければと思っております。

委員長さんからありますか。

○高木委員長 萱野先生ありがとうございました。

今、お話を伺ってしまして、特に昨今の若い世代の高校生、アウトプットする力が弱いということをおも同様に感じています。これからの子供たちが自信を持って世界に羽ばたこうとするときに、やはり一歩前に入る力というのが大事なような気がするのですが、それを誰がつくるのだというときには、先生のお話のあったとおり、自らアウトプットする力を、社会に出ることではなくて、学生時代から、高校生ぐらいから養っていくことが必要ではないかと感じるのですが、具体的に子供たちがいろんなチャレンジをされていますけれども、先生が留学されたときに、今のお話の中で 25 歳のときに留学されたというお話ですけれども、その当時ですと、それでも随分若い留学生ですね。今は高校生なんか、大学生もそうなんですが、留学というものに対して随分消極的な人が多いような気がするのです。その子供たちに、こんなに世界が広いのだよ、こんな世界でいろんなことがあるのだよということをいろんな面で教えていくのも、何かこういった手法があるよとか、こういった手続といたらおかしいですけども、何かあるよということを教えていただければありがたいと思うのですが、御経験なら結構なんですけれども。

○萱野教授 例えばいろいろあると思いますけれども、結局何かアウトプットするなり、例えばこれは別に海外でなくてもいいと思うのです。国内でも今、少子高齢化の進展等によってもものすごくいろんな課題を日本は抱えていますから、そういった課題解決するという場面でもいいと思いますけれども、実際に課題解決するというのも、この場合アウトプットということを含めて考えると、アウトプットする力を付けるには、アウトプットする経験を重ねるしかないのです。それは細かいところからそれをしていく、そういう場を設けていくということだと思っております。何か1つこれをやればすごくこれで世界が広がって次にいけるということではなくて、小さな、小さな日頃の積み重ねの中でアウトプッ

トする経験を積んで、それによって力を養って行って、そこで自信を付けていくということだと思っております。ですので、まずは細かいことでもいいからやれることからというところが1つのヒントなのかな、入り口なのかなと思います。

それから、語学に関して言うと、私も留学していたときに、よく日本人からこういうことを言われたのです。発音とか文法とかぐちゃぐちゃなのに、よく恥ずかしくないな、私は積極的にできるだけ話そうということで意識してやっていたのですけれども、そうすると同じ日本人から、あんな下手なフランス語でしゃべって恥ずかしくないのかみたいなことを言われることがあるのです。どうも私たちは文法も、発音も完璧でないと外国語を話せないという心理的な壁がありますが、実際にいろんな国の人たちが集まってフランス語を使って、フランス人の中においてコミュニケーションをとっていると、あんまり関係ないのでですね。私たちが気にしているほど世界の人たちは気にしてないことが多いのです。

日本は、これはいいところだと思いますけれども、非常に空気を読んで、いろんなものを配慮してしまう。この傾向は今の若い人は非常に強くなっていて、空気を壊さないことだけに1日中能力、エネルギーを使ってしまうという状況がありますから、何とかそこをもっと自分のやりたいことに一歩踏み出せるようになってほしいなと私自身も思っていますけれども、これは難しいなと思いますね。経験の積み重ねということと、あとは今いるこの空気だけが自分の世界ではないのだということを少し感じるようにしなければいけないのですけれども、具体的にはどういうことがいいですかね、私も難しいなと思います。

学生を日頃見ていると、学生も特に女子大だというものもあるかもしれませんが、皆ものすごく周りに配慮して空気を読むのです。これはやさしいことの表れで良いことでもあると思いますけれども、自分が一歩踏み出そうとするときにはどうしても足かせになってしまうということがあります。ここが使い分けるようになるといいなと思いますけれども。

○高木委員長 ありがとうございます。

以前、テレビか何かで萱野先生のお話を聞いたときに、英語圏かフランス語圏かというような中で、思い切ってフランスへ行ってみようということを聞いたことがあったのですけれども、今思い出して、一歩前に出る、アクションを起こすということをこれからの若い人たちにどんどん植え付けていくというのはおかしいのですが、そういうのも伝えていかないと、なかなか言葉ではグローバル化、グローバル化と言っておいても、そこに辿り着かないのかなと今改めて感じました。

逆に言うと、先生の思い切ったアウトプットすることをこれからも伝えていきたいなどいうのは感じました。

○萱野教授 そうですね。やはり海外に行くことだけが一步踏み出すことでもありませんので、例えば日常の何か問題を解決してみる、そこで自分なりの行動力を出してみるということの積み重ねの中に海外があつたりとか、別の舞台があつたりすると思いますので、小さな舞台をどんどん用意していくということですかね。

私は今のお話でいうと、知的なレベルで、これは別に学問の世界だけでなく、いろんな世界で活躍するために一番大事なことというのはある意味度胸なのかなという気もしているのです。だからといって傍若無人に振る舞うことがいいということではなくて、世界中で見ると日本人は非常にやさしいですから、そのやさしさの中で何かもっと度胸が加わると本当に最強になるのだなと私はいつも思っております。それを何とか付けるためには、大人からの最初はやはりバックアップが必要なのだろうなと思います。

○吉田委員 今のお話の中で、まさに私どもは教育の小学校、中学校、高校、大学を含めて、そういうバックアップするということが求められているわけですが、今、大学では学生さんたちが、先生がおっしゃるようなアウトプットするような、そういう力を身に付けるためにどんなふうにごやっておられるのか、少し具体的なお話いただければうれしいのですが。

○萱野教授 まず社会に出たら、大事なことはアウトプットなのだという認識をまず持ってもらおうということが最初のスタート地点では必要ですね。特に大学生は高校までの勉強でインプット中心の勉強をしてきましたから、アウトプットということがそもそもどういうことかということはまだあんまり実感できてないところがあるのです。大学以降は、例えばレポートを書くにしても、教科書丸写しとか丸覚えだけでは書けませんから、ちゃんとそれを自分なりに理解してまとめるという形でアウトプットの作業に移らないといけませんし、ゼミで発表するのもアウトプットですし、企業に入れば、就職活動の時点で自分の長所はどこにあるのかとか、なぜこの会社を志望したのかとか、そういったところでアウトプットが常に要求されるわけですね。企業に入れば、例えば業績の報告でも、それから、企画の発表でも、常にアウトプットが必要になってくるということ、社会ではアウトプットをするということが知的活動なんだということをもまずは教えるという、まずそういう認識を持ってもらおうということですね。

その上でアウトプットをしてくださいよということで、例えばゼミが大学だと中心の場

所になりますけれども、全部学生に任せるといことですか。学生に任せて、例えばどんな、こういう問題があるけれども、あるいは、こういう分野、例えば私のゼミであれば哲学と社会の問題を扱うゼミですけれども、その中で皆はどういう問題をやりたいか、問題から探してもらって案を出してもら。それをどうやったら解決できるかということも考えてもら。

それから、私はグループワークもいいですけども、グループワークだとどうしても中心人物にみんなが頼ってしまってできてしまうので、その中でチームでやるという良さがありますけれども、個人で動いてもらうということのほうが効果が高いことが多いなと思います。何か例えば課題があったら、課題の解決もそこで学生たちにしてもら。OJTでしたか、要するに実際にやること自体がトレーニングになっているというような、そういうことをしていますね。

あとは私は大学の授業で哲学の授業を受け持っていますけれども、私立大学ということで600人ぐらいのマスプロ授業になります。そうなるとうしても一般的には講義をして、半期なら半期が終わったときに試験をするという形になりますけれども、全く効果がないのですね。試験の勉強しておいてくださいよといっても一夜漬けで勉強して、あとは試験会場に行ってぱっと問題を解いて出す。そうすると翌日には内容を忘れていますし、テクニク的なものだけが継承されてきている形になりますから、私はそういう試験もやめて、毎回、毎回1時間半の授業の最後の15分ぐらいに、今日やったことに関して、こういう問題があるからこれをどう思うかというのを毎回レポートというか、意見、ペーパーを出してもらようにしています。それで平常点だけでやる。もちろん最後に試験をしてもいいのですけれども、日頃やはり何かインプットしたものをどうやって自分なりにアウトプットしていくかという訓練をするようにしています。

○吉田委員 今も先生が大学へ入るまではずっとインプットできているのだ。自分の言葉で言いかえるとするならば、ずっと教えられて、指示されて、小さいうちからずっとそこまでいって、では大学生になってはじめて自分がアウトプットしなければいけない立場になる。でもそこが弱いものだから、いわゆるコピペとか、そんなものが氾濫するようになって、なかなか自分のことが出せないのではないか。そうするとひょっとすると小さいときから、あるいは小学校へ入る前から、私は幼児教育のことでやっているのですけれども、そういうときから、何か教え込まれてやるということではなくて、今のアウトプットする力ということ考えたとき、自分でどこまでも歩いていけるような、そんな力を生活の中

で、遊びの中で何か育つ、そこがスタートではないかなと今ふっと思ったのですけれども。

○萱野教授 我々の教育の方針自身が、どうしても何か知をアウトプットするという形であまり組み立てられてないところもあるのですね。そもそも大学の教育もインプット中心になってしまうことがあるぐらいで、我々自身が教育の最終目標はアウトプットできる能力なんだ、技術、例えば大工になろうという人たちに技術を教えるときも、最終的にはその人が自分で技術を使いこなせるようにならなければ意味がないですから、最終的にはすべての活動というのは学ぶ活動の目的はアウトプットなんだというような形で、教える側自身が目標設定を変えるということが最初に必要なんだと思います。それだけでかなり変わると思います。

○吉田委員 ありがとうございます。

○門井委員 今、先生がアウトプットの話をいろいろされたのですが、今の社会状況を見ると、声なき大衆が強いみたいなんです。要するにアウトプットすることに対して足を引っ張るみたいな、寄ってたかって非難する。ソーシャルネットワークの世界みたいなことで延長するように、そういった状況が見られて、アウトプットすることに対する怖さ、恐れみたいなものが今の青少年というか、子供たちにも相当強いのではないかなという感じを受けています。

ですから、それをいかに打ち破っていくか、それと今、先生が言われたように、そういうことをきちんとアウトプットなんだよと言うと、これが大事なんだということを教える社会というのを教育も含めてつくっていく必要があるのだというお話をされて、私もそのとおりだと思っているのですが、こうした社会の風潮を、先生としてはどんな風に考え方を変えていくようにするのがいいのか、その辺、先生のお考えをお聞かせいただければありがたいわけです。

○萱野教授 そうですね、例えばインターネットで、今回のエンブレム問題でも、中身は別として同じような形態が見られたと思うのですね。そういった社会の大きな在り方自身を変えるというのは難しいことだとは思いますが。

教育の場でできるのは自信を与えていくということだと思うのです。それはある種社会の信頼を構築していくということ、社会に対する信頼、個々人が社会に対して持っている信頼を強くしていくということでもあるのですね。何かぱっとインターネットで自分に対して悪口が書かれたときに、社会にも自分の行き場所がないかのような気持ちになってしまうのは非常に私としては残念だと思うのですね。こういうふうに書かれていても、こち

ら側には自分の信頼できる人間がいるとか、信頼できるような社会関係があるということが実感できれば、そこで打ちのめされずに耐えたりとか、さらにそういうものを気にせず  
に一步前に足を進めることができると思うのです。そうした信頼づくりはいろんな教育の  
現場でできることだと私は思います。留学するにしても、その部分があるかどうか、海外  
に行くのはやはり不安ですよ。不安ですし、外国人自体が怖いとか、外国留学先で受け入  
れられなければいけないからものすごく迎合してしまったりとか、そういう報道をよく見  
るのですけれども、やはり例えば海外で失敗したとしても、日本に帰っていけばちゃんと  
行き場所があるとか、それを受け止めてくれるような社会関係があるというようなことが  
はっきりしていれば、逆に強く一步踏み出して、むしろいい成果が出せるのではないかと  
思いますので、そういう信頼づくりというところなんではないですか。

○門井委員 ありがとうございます。

○上田知事 本県の教育の中で、こういう萱野先生みたいな考え方ということなどを現実  
的に現場の教師の人たちは、例えば目標がそれぞれ個人としてもあるし、学校としてもあ  
るし、グループとしてもあるのでしょうけれども、こういうインプットよりもアウトプッ  
トという形のものになっているのか。あるいはまた例えば東大に入ることが目的になって  
いく、そういうことを売りにしている部分も多少、私も実は売りにしているのですけれど  
も、関西に行った時に、学校というのは5年ぐらいで常に上位の東京大学入学者が1番が  
2回ぐらいで、2番、3番、4番ぐらいですよ、レベルの高い高校もありますよ。早  
稲田も、立教も、慶応もありますよ、附属高校もありますよ、そんなことでお子さんの教  
育もばっちりですから、丸ごと来ても大丈夫ですよと調子のいいことを言っているわけ  
です。

まさにこれはどちらかという、あんまりいいことでない話までしているのですけれど  
も、目の前のとりあえずのいいことだけをアピールしているのですけれども、現場ではど  
うなのでしょうかね。

○関根教育長 一般的には、やはり今の高校の教育ではインプットのほうが強い傾向があ  
ることは確かですね。アウトプットという意識は低いと思います。

ただ、伝統校で、公立での進学校、例えば浦和高校ですと、私も校長として勤務したの  
ですけれども、かなりアウトプットもしています。教員のほうもそういう意識があります  
から、浦和高校ではアウトプットを重視していました。そういう力を付けるという点では、  
物理の論文指導はすごいですね。50年間の実績があるのですが、浦高では物レポという物

理のレポートがあります。大体年間で10本から20本書かせる、最初の数本はすべて教員がだめ出しです。よく、大学生になるとレポート作成が大変だなどと話題になりますが、あれを経験した子たちは、大学に行って、全く困らないのです。浦高でもっと厳しいレポートを課されたので、既に十分鍛えられています。それは意識してそうしているのです。また、ディベートなども公民などではかなり意識して取り組んでいます。しかもディベートをやるために、その前の段階でどういう準備をさせておくかということも意識して授業を組んでいます。

ただ、やはり今の大学の入試はインプットをしておかないと点数が取れないですね。かなりの部分はそちらに能力を割かなければならないということは確かです。でもそうでない部分でも、やはり伝統のある学校は優れています。大学に行ってから必要であるということが分かっていますので、入るための勉強だけでなく、入ってからの勉強というのでもかなり意識しています。それだけのプライドを高校の教育でも持っていますので、一概にすべてがインプットではないのです。ただ、授業時間のかなりの部分をインプットに割かざるを得ないというのが今の現状で、それを今回の教育改革でやりたい、ということで学び方の方法を変えていこうというのが今の流れですね。

ただ、アウトプットを意識していくということについては、言葉の持つ力を駆使して、印象のあるメッセージとしてアウトプットを引用していけばインパクトがあるのだと思います。そういう本質的なことは気が付かなかっただけではなく、考えてはいたのにもかかわらず、なかなかそこに労力を割けなかったという、そういう思いが高校の教員にはあると思うのです。そのようにやりたいんだけど、なかなか現実的にはそうはいかなかった。それが、今の潮流にだんだん変わりつつある。ですから、次はアウトプットという言葉を表に出していくと、現場の教員がスッと腑に落ちると言う感じがしましたので、非常に参考になりました。ありがとうございました。

○萱野教授 やはり大学入試も変わらないと、なかなか高校までの教育も変えることができないと思うのです。大学入試がずっとインプットの力を試すようなものであれば、やはり高校はそれに対応せざるを得ませんから、大学も変わらなければいけないということだと思いますね。

アウトプットといったときに、要素として、今日もいろいろお話が出ましたけれども、2つ大事だと思うのです。1つはアウトプットするだけの勇気というか、先ほどもいろいろ御質問がありましたけれども、行動を支えるための何か精神的な基盤、ちゃんと勇気を

与えるということ、もう1つがアウトプットするときには、原理というか、その物事がどう成り立っているのかということ把握することができるかどうかアウトプットの力に非常に結びついてくるのですね。丸暗記では実はアウトプットには全く対応できずに、例えば司法試験でも、すぐに受かる人というのは法の原理を見抜く力はものすごくあります。法の条項を丸暗記していれば、それはいつまでたっても終わらないです。丸暗記ではなかなかアウトプットができない。でもこういう原理でこの条文というのはできているのだという原理の部分が、例えば法というのは権利を組み合わせているんなものできていますけれども、この権利とこの権利がこう組み合わせるからこの条文があるのだというふうに理解している人は、かなり早く司法試験に受かりやすいのです。物事の原理をつかむということと、アウトプット、行動力を支える勇気を持つ、この2つが私はアウトプットの根幹にあると思います。原理を把握するというのは哲学がずっとやってきたことですので、私はそこが専門的には力を発揮すべきところだと思って日々教育には携わっているのですけれども、例で挙げると例えば歴史教育でも、日本はこうなりましたよということで細かい出来事の羅列を覚えることに重点が置かれますが、フランスでは、例えば何でフランス革命が起きたのか、どういう状況があつて、どういう原因があつたからフランス革命が起きたのかということを考えさせるのです。これはやはり原理を探らせるということになると思います。そういったところに少しずつでもシフトしていければ、アウトプットの力は付くのではないかなと私は思います。

それがさっき言ったように、ルールづくりも、結局なぜこれをやるかという根拠と、それから、この物事はこう成り立っているべきだという原理、原則というものが必要になりますから、国際的な例えばTPPのようなルールづくりになっても、力を発揮できるのではないかなと思っています。

○藤崎委員 私は89年度にソウルに語学留学しまして、ちょっとそのころのことも思い出しました。やはり語学ができるようになりたかったのですが、実際に実は大学でも特徴がありまして、ソウル大学はとにかく読み込み、翻訳、そういった勉強が中心になっていました。延世大学は会話や発表が中心になっていたので、とにかく語学力をつけようとそちらに留学することにしました。語学がだめでも、例えば現地のものをおいしく食べるとか、この人と一緒にいると楽しくなるという日本人留学生が人気がありました。そしてビジネスも成功したりしていました。さっきおっしゃったように、本当に伝える力、伝えたいという気持ちが大切だと感じたことを懐かしく思い出しました。

ちょうど今日、委員長の提案で、実は今後の18歳の選挙権に対して、どういう風に高校での教育を考えていこうかという話がありました。先生から御覧になって、今後、特に学生をたくさん教えていращやるといこと、それについて今お考えになられていること、それから、埼玉県でも、こういったことをしたほうがいいのかという御提案をいただけたらと思います。

あともう1点は、女子校のスクールカウンセラーをやっています。今、考えるのは女子教育についてです。埼玉県にも女子高もありますし、個人的にはあまり男女ということさら強調するのは好きではないのですが、やはり教壇に立たれていて、女子教育の将来について感じていращやことを教えていただきたいなと思いました。

以上です。

○萱野教授 最初のが18歳に選挙年齢が引き下げられて、それについてどのように、特に教育の部分でどう考えるかということですね。

私はずっと18歳に選挙年齢が下げられることに賛成して推進派としていろいろ発言をしてきまして、その一番の理由が、年によってはということにはなりますけれども、18歳で大学や例えば仕事で実家を離れる前に選挙ができる機会が与えられるということなんです、一番の理由というのは、要は地元にいるときに1回選挙があるかないかというのは、恐らくその後の人生にとっていろんな意味で影響を与えてくるだろうと思っております。そこで例えば家族と選挙、政治のことについて話す、学校で話す、そういう機会が得られる。私は愛知県出身ですけれども、18歳で東京に来て、一度も愛知県で投票したことがないので。そうすると地元の選挙、もちろんこれは年によってある年とない年がありますから、必ずしも18歳に下げられたからといって毎年あるわけではありませんけれども、でももしあれば、あっ、地元の選挙はどうなんだということ、少し関心がわく可能性もあるのです。そういう点で、地域の公民教育というものに非常に強く影響を与えるのではないかと、ずっと18歳に選挙年齢を引き下げることに、私は推進派として発言をしてきました。

私はその場合に、どういう教育が役割を果たすべきなのかということ、私自身は、具体的なことを教えるべきかなと思って、例えば政党の選挙のときの公約を見てもあんまりよく分からないと思うのです。どこがどう違うのか、特に選挙になるといいことが結構書いてあつたりしますので、なかなか比べられないと思います。よくインターネットでも、あなたの主張を、これがいいと思うか、悪いと思うかと

かいうことで○×を付けていくと、あなたの向いている政党はここですよみたいな答えが出るようなサイトがあるのですけれども、あんまりやってみると役に立たないのです。何でなのかという、結局選挙が終わって、実際に議会が始まると、予算をどう分配するかという現実的な制約にあらゆるものが縛られてしまうということがあると思うのです。私は結局議会でやっている一番大事なことは予算をどう使うかということだと思うのです。それは人々から集めた限りある財源をどう使うのか、ここの部分を考えてもらうことのほうが、選挙でどこに投票するかということより実は大事なのかなと思っております。

そこでは人口がどうなっているのか、あるいは社会の中でどういう問題があるのか、そういうことも考えなければいけませんので、単純にここの政党が良い悪いみたいな形でやると、また教育を政治の場にしているのかという議論が出てきますが、私はそういうことは望ましいと思っていません。むしろ例えば埼玉県であれば、これだけ予算がある。今はこういう形で使われている、これはもっといい使い方があるかどうか、あるいは今のほうがいいのか。そういうことを学んでもらうということがいいのではないですか。お金の話はみんな好きで、何歳からでも好きなのですね、関心も引きやすいかなと思っております。ですので、公民教育といって、何か言葉の上で主義や主張を比べるのではなくて、現実的なところでお金の使い方ということを学ぶというのがいいのかな。あるいはそのお金をどう集めるのかということも含めて、誰がどういう形で負担するのが一番公平なのかということも議論に含めてですけれども、そういう具体的な話がいいのではないかと考えております。

女子教育に関して言うと、今、いろんな企業の方々に就職試験の状況を聞くと、非常に優秀だと言われます。女子学生のほうが男子学生のほうよりも平均的に優秀だという声はよく聞きます。最終面接、性別関係なくやると全員女であるから、男に下駄を履かせないと合格しないぐらいだみたいなことを言われるのですけれども、私も女子大で教育をしていて、非常にまじめです。言ったことをやりますし、それに就職活動も非常にまじめにやります。ですので、そのまじめなところというのはすごくプラスのところなんだろうなと思うのです。特に今は昔の世代に比べて、社会からこぼれ落ちてしまう恐怖感というのは皆さんものすごく持っていますから、私が大学のときは、何か適当にやっけていても、どうか就職するだろうとか、そういう気持ちで、バブル全盛期のころでしたから、みんな余裕で構えていましたけれども、今の学生、若者はそんなことはありません。本当にちゃんとやらないと自分がこぼれ落ちてしまうかもしれないという気持ちでいますから非常にまじ

めです。

ただ、私はもうちょっと問題になるなと思うのは、やはり言われたことから外に出て何かをしようというところの勢いが少し足りないな、そこは少し乱暴でも男子学生のほうが、1教えると10ぐらいになって、リスクも多いけれども、返ってくるというようなことがあるのですけれども、女子学生はその部分で、自分で言われてないところまでどんどんいくというところが少し弱いのかなという気がしていますので、そこをもっと伸ばせば、何かどんどん世界が開けてくるのがあるのではないかなと思っています。私もいつもそこは苦勞しています。

○上田知事 時間がなくなったのですが、志賀委員は大丈夫ですか。

○志賀委員 私は中学生の子供がおりまして、日々奮闘している毎日なんですけれども、今の子供たち、これは日本人の特性だと思うのですが、守りの文化といいますか、自分だけが本当に特別なことをやって、周りと違うことをすることで、何か言われるのではないかと、そういった感情がどうしても芽生えてくるのかなというのを見ていて感じるのです。やはりそういったところをアウトプットをするためには、やはりそこをさっき先生のお話にありましたように、そこから勇気を持って一歩前に進めるような努力、それにはやはり将来的に大学に入るのはもちろんですけれども、もっと先の自分の夢や、希望や、社会貢献というものに焦点をあてて、そこに至るまでに自分が今何をすべきかということを考えることが大事なのかなと思っています。やはり幼いころからの体験や、体験学習というのは私はすごく必要なのかなという感じではいるのですけれども、ただ、現状を見てみると、正直なところ、親が子供を手放す時期というのがなかなか難しいような気がしてまして、私から見ると、親というのは本当に見守り、そして自立させるのが親の仕事だと思うのですが、なかなかそのところがうまくいかないで、ずるずる子供と一緒に親が就活までいってしまっている保護者の方も実際に多く見えています。そういったところをひょっとしたらお感じになっていることもあるのかなと思うのですが、そういったことはどうでしょうか。

○萱野教授 まず中学の子供ということであると、やはり中学が一番難しい時期ですね。自我がだんだん芽生えてきて、今までの家庭と学校が一直線にいたのが、断絶が生まれてきて家庭と分けるようになって、ただ、こちらはこちらで自立しようとしても、実はものすごく同調圧力の中で、自分は恥をかきたくないという気持ちがまず最初に出てきますから、そこで窮屈な思いをしながら大人になっていく過程だと思うのですね。中学はそうな

んですね。

高校になると、特にまた偏差値によってある程度振り分けられて、特に進学校は変な足の引っ張り合いというのはむしろなかったりして、のびのびとできるような環境があった。私なんかそうだったのですね、中学と高校で全く雰囲気が変わって、こんな自由でいいのかと最初とまどったぐらいでしたけれども、愛知県は管理教育が厳しいところでもありましたし、ただ、中学だとどうしてもいろんな学生がいる、そこもいいところだとは思いますが、そこで例えば自分は一生懸命運動、体育の授業で走りたいのに、女の子だと自我が生まれて、何、まじめに走っているのという形で、体育なんてまじめにやらずにちょっと力を抜くぐらいがちょうど仲間の中でいいんだということ、本来自分は体育でいっぱい頑張りたいという機会が与えられているのに、そういう機会を生かせなかったりするか、そういったこと、あるいは授業で発言をしたいのに、発言すると、何、あの子は発言しているの、ばかじゃないのみたいなことを言われるので発言できないとか、そういう空気に一番さらされるのが多分中学のころかなと思うのです。

そのころに、難しい時期だというのは非常にわかりますけれども、そこをどうやったらいいのかというのはちょっとわかりません。ただ、言われたことの問題意識というのは私も非常にわかるというか、共有しているものがあります。どこかでやはり逃げの場所というか、みんなの同調を集めるのにさらされなくてすむ場所をそれなりに用意して、複数の中でうまくそういったものを使い分けられるようにする、環境をつくるということがいいのでしょうか。恐らくは。学校で皆でいるときに、1人だけ突拍子もないというか、異行みたいに思われるのは、中学生では多分耐えられないと思うのです。

もう1つ何でしたか、後半のほうは。

○志賀委員 私は親ができてないと思うのですけれども、基本的に就活にも親と一緒にいって行ったりとか、そういうことが非常に多いので、そういったところなんかはやはり大学に入るときも親が、就職も親が、そこまで私は行きたくないなと思ってはいるわけですが、今、そういった現状を見て先生はどのようにお考えになられているのかなと。

○萱野教授 本来、教育は1人で生きていける力を付けるためのものですから、親がずっとついていてというのは、教育のために親がつきっきりになるというのは、本来は矛盾していることかなとは思っているのですけれども、ただ、私も大学で、もう今や入学式、卒業式に親御さんが来られるのは当然で、大学としても拒否はできないのです。やはり大学、特に私立大学だとお客さんという位置付けになりますから、特に親御さんがその出資者ですか

ら、その意向に逆らうことはできませんし、就職活動も今や親御さんがついて行く、それから、単位の認定でも相当今苦情があります。大学で。何で落としたのだ、ものすごいです。大学もクレーム処理部みたいなものをつくらなければ対応できないのではないかとと言われるぐらいで、なかなか興味が沸いているという状況ですね。

私はできるだけ、特に大学に入ったら突き放すぐらいのほうがいいだろうな、本当に信頼関係があれば、困っているときというのは相談に来ますから、そこまでそれをちゃんとつくれるかどうかのほうが大事だと思います。ずっと付きっきりでないと心配でしょうがないというのは、むしろ信頼関係をつくるのに失敗しているということですから、そこはやはり親御さんのほうも試されているのだらうなと思います。

○志賀委員 ありがとうございます。

○上田知事 すみません。なかなか結論を出す会ではございませんので、萱野教授のほうからは、貴重な御意見をいただきました。一旦有識者からの意見交換ということに関しては終了させていただきます。5分程度の休息をとって再開をしたいと思います。

萱野教授には誠にありがとうございました。

○萱野教授 ありがとうございます。

[暫時休憩]

○上田知事 では再開をいたします。

## (2) 教育の針路

○上田知事 教育の針路、3つ目の高校再編整備のところからです。

○関根教育長 私から簡単に、高校再編整備のものと、4つ目のグローバル人材と一緒に説明させていただきます。21 ページを御覧ください。

これまでの高校再編整備の実績を示した図であります。再編整備による学校数の推移と、その間に開校しました特色のある新校を掲載したものでございます。

続きまして 22 ページを御覧ください。

こちらは募集学級数が5学級以下という小規模の高校の数の推移でございます。前期再編整備計画による統廃合が始まったのが平成17年です。17年度以降、5学級以下の公立

高校数が減少しております。

続きまして 23 ページですが、こちらはおよそ 50 年間の公立の高等学校全日制の生徒数と学校数の変遷でございます。大体平成元年あたりがピークになっております。

続きまして 24 ページ、こちらは高等学校再編整備が始まった平成 13 年度から昨年度までの公立高等学校全日制の生徒数、教員数、学校数の推移でございます。生徒数の減少とともに学校数、教員数も減少してきております。

続きまして 25 ページです。こちらはこれまでの高校改革でいうと、公立高等学校全日制における国立大学進学者の状況を示したものでございます。特に折れ線グラフで示したものが進学率になります。ずっと上昇傾向にあることがわかります。

続きまして 26 ページですが、こちらは高等学校における職業教育の取組でございます。各学科で必要とされる日々の職業教育のほかに、「埼玉からアジアへの扉を開く！実践的職業教育グローバル事業」などの事業を実施しております。

続きまして 27 ページですが、こちらは職業教育の成果についてまとめております。就職内定率は、リーマンショックがあった平成 19 年度から落ちまして、急速に落ち込んだものも一貫して改善ベースになり、今、過去最高ベースになっております。

それから、誠和福祉高等学校では、3年連続で介護福祉士の国家試験の合格率が 100% になるほど、資格取得においても成果をあげております。

ここまでが高校再編整備関係です。

続きまして 4 番のグローバル人材ですが、28 ページになります。

こちらは埼玉県グローバル人材育成基金の概要の整理でございます。県からの当初積立金と民間寄附や個人からの寄附により運営しております。特に平成 23 年度に基金を創設して以来、基金残額は約 7 億円、これまでに受けた寄附件数は、平成 27 年 6 月 1 日現在で 47 件、約 4000 万円にのぼります。

29 ページですが、この埼玉県グローバル人材育成基金を活用した海外留学制度の成果でございます。海外留学の促進のため、23 年度から合計で約 1100 人に対しまして計画支援を行ってまいりました。協定留学コースでは、これまで 824 人を海外に送り出してきました。

ここまでが簡単でございますが、資料の説明でございます。

○上田知事 ありがとうございます。

また 21 ページに戻りますが、基本的には生徒の数が減っている、それに合わせて学校

の再編成をこれまで行ってきたという事実がございます。この事実と、今後の再編整備、それから、また、その再編整備に関して、どんな形で今度は行っていくかという部分、こういう論点があるのかなと私は思っておりますので、再編整備を行う過程の中での課題と  
いうのでしょうか、これまでどんな課題があったのか、例えば一般的に閉鎖される側の卒業生や地元側とかというのはノーという話ですね、新しいものをつくる時にはイエスが多いですけども、ノーという話が多いですね。そういうノーという話をどう整理しながら発展的に解消させたり、あるいは合同化というか、共同化というか、くっつけていくといいでしょうか、そういったものをやっていくかということになるわけですが、今後の事務方としての考え方について教育長のほうから開陳していただければと思います。

○関根教育長 今後の高校については、今年、魅力ある高校づくり課を新設しまして、ここで再編整備を含めてより高校を魅力のあるものにしていこうということで、現在、検討中  
でございます。今後は生徒数のこれからの見込みと、建物の維持管理の問題等も合わせて考えていく必要があるかなというところで検討しているのが現状でございます。

今の段階では、こういう見込みでこうなりますということを出せる状況ではないのですけれども、これを検討していこうということでございます。

○上田知事 検討のためについての部分では、26 ページの職業教育の取組について、その辺については  
どういう県的な考え方を持っているのでしょうか。

○関根教育長 特に職業教育ないし専門高校について、再編整備は基本的に大きく行ってきており  
ません。そういうものを現実的にどうするか。例えば工業系ですと就職率が非常に高いですし、県内の企業からの求人も多いということも考慮に入れなくてはなりません。ただ、実際に、これから生徒数が減り、予算にも限りがある中で、例えば工業高校をどうしていくかということについては、単に予算の問題にとどまらず、今後の学科編成の在り方等についても多角的に検討していく必要があります。専門高校全般についても、どうい  
う形で維持していこうか、またはどういうふうに再編していくかということは検討を進めざるを得ないと考えています。

○上田知事 27 ページの農工商業学科卒業者の進路状況を見ていくと、就職者の数は増えて  
いるわけですね。

○関根教育長 そうですね、専門学科は就職の求人も回復してきていますので、就職者も  
かなり増えています。

○上田知事 進学者は逆に減っているのですね。

○関根教育長 微減です。やはり不況で就職難の時代には、進学希望者が多いということはあると思います。

○上田知事 全体の中で推移というのはどうなのでしょう。例えば進学者の合計の中での割合というのですか、全体を通しての割合が職業教育のほうが少ないのですか、それとも多いのですか、伸び方。全体の中で。例えば進学者は増えていますね、当然、進学率はどんどん増えているわけですね。それに対して普通高校のほうの伸びのほうが高いのか、それとも職業高校の伸びがどうなのか、まずはそういう意味での比較です。

○関根教育長 そういう意味では、この 27 ページの図でわかりますように、職業教育のほうは進学率はさほど伸びていません。それよりも就職のほうが上がってきていますから、そういった中で全体では進学率は上がっているといっても、職業専門高校のほうの進学率が上がっているとは言えないと思います。

○上田知事 入学者数というか、職業高校を希望する数というのは、実質的にはどうなのでしょう、例えば 10 年前と今と比べて。

○関根教育長 大きな変化はなくきております。ある程度一定限度の数で落ち着いているという感じです。

○上田知事 もちろん学科の中でのカリキュラムの編成の変化というのは相当あるわけですね。

○関根教育長 学科の名前を変えたりして、特に工業系等では、今の時代に合わせたカリキュラムに変えてきております。そういうことでは、絶えず改革はしてきております。

○上田知事 今日的にいわゆるコンピュータやロボット化の中で職業教育で扱っているところがロボット化していくとか、あるいは社会の中で意味を持たなくなってくるとかということで、逆にこういう分野しか残っていないとか、そういう色分けみたいな形は検討しているのでしょうか。

○関根教育長 そこまでの具体的な検討というのはしてないのですけれども、ただ、ロボット化するにしても、技術的な基本の部分、例えば旋盤であるとか、そういう基本的な部分は、やはり身に付けたものがいなくなると困りますので必要ということになります。なんでもロボットだけに任せておけばよい、というわけにはいきません。高校の学校教育が今の実態に合わせて変えていく部分と、変化の中でも変わることなく、ベースとしてきちんと教えていく内容というのがあると思います。ただ、それであっても、どんどんロボット化が進み、人工知能等が入ってきていますので、そういう部分への対応という意味では、

今後、いろんな意味の再編を検討していかなくてはならない時期にきているのだと思っています。

○上田知事 今後も基本的にはまだ統廃合、再編が必要だという認識なんですか。

○関根教育長 子供たちの数がこのあとまた減っていきますので、そういう意味では、間違いなく一定限は減らされるということと、建物も耐久年数等の問題がありますから、建て替えを含む大規模の改修をせざるを得ないということも当然起きてきますので、そういうことを見据えて、いろいろな意味で専門高校を含めた学校の再編整備ということを検討せざるを得ないと思っています。

○上田知事 私からばばっと共通認識を見るために伺ったところですが、皆さんのほうから県立高校の再編統合について、一段落はついたのでありますが、今後もまた展開せざるを得ない。となると一段落ついたので一つの総括と、今後の展開についてどうするかということについての方向性は一定程度出さざるを得ないわけですね。

○関根教育長 はい。

○上田知事 そういう部分での論点を御指摘、あるいは御意見を出していただければと思います。

○吉田委員 これから先も少子化に伴ってそういう統合、再編をする、また新しい形の学校をつくらざるを得ない。そういったときに、今年から魅力ある学校づくりのプロジェクトがスタートしたという中で、私は教育委員に任命していただいてから、割と早い時期に京都の堀川高校でしたか、荒瀬先生の話聞く機会がありまして、何でも無いそういった学校を建物からして自分のビジョンに従って、特に進学校に変えていったというようなストーリーだったと思うのですけれども、学校をこれから考えていくときに、こういう教育をしたいのだ、そのためにこういう学校をつくりたいのだというようなビジョンですね、こういったものを実は現場の先生たちから吸い上げるといったらなかなか難しいのではないかというのであれば、例えば校長になる前の教頭時代に、そういった意欲のある人には、どういう教育をする、こういう学校をつくるといったような提案をしていただき、この中で魅力あるものを取りあげて、具体化するときには十分な財政的な裏付けの中でやっていく。校長先生の任期についても2年、3年で代わるのではなしに、ある程度5年、6年落ち着けてやっていただく。こういう中で魅力ある学校、本当に生徒がこの学校に行きたいというような学校が生まれてくるのかなという、機械的にこの地域だからもう統廃合してしようがない、ここでやるか、中間にするのか、あるいはこっちを潰してこっちを残して

やるというだけの統廃合であれば、なかなかそこまでいかないのだけれども、そういうことをチャンスにしてそんな学校づくりをしたら面白いかなと思っています。

○上田知事 伊奈総合学園なんかやはり当初、非常にユニークなというか、新鮮な、なおかつ魅力的な形で受け止められたわけですね。この再編・統合の中でどこが一番そういう意味での魅力的なとか、新鮮なとか、特色のあるという形になったのですかね。

○関根教育長 伊奈は今回の再編整備ではなく、その前の時ですね。

○上田知事 ここが評判になっていますねというような、あるいはここに進学希望者が多いですねとか、こういった部分でどうなんでしょうね、実際は。

○関根教育長 21 ページに、これまでの相当ある再編整備の学校が出ておりますが、例えば戸田翔陽高校というのは3部制の定時制です。朝、昼、晩という3部制で、ここは様々な事情や背景により、例えば不登校を経験した生徒も通っておりますし、登下校の時間帯も様々ですので、かなり多様な受け入れ体制が整っています。このような学校は、かつてはなかったものですから、そのような点が戸田翔陽とか、吹上秋桜とかでは、以前にはない学校として子供たちも通ってきているかなと思っています。

そのほかでは、誠和福祉高校も、福祉の分野では、特に資格試験などは極めて高い合格率で100%という実績を出しています。これらの学校のように、新校にして統合した結果、魅力を出しているという学校はあると思います。

全体的にそういう意味では、統合して、かつてはなかなか生徒が集まりづらかったものが集まるようになったとか、魅力を出せたということはあると思っております。

○上田知事 全く衣替えしたという感じでいくと、滑川総合なんかあるのですか。秩父農工科学はやはり秩父農工が母体になっているのですね。

○関根教育長 そうですね。秩父農工も家庭科の観点もつけ加えて農工科学という形になりました。

○上田知事 進修館もやはり行田進修館が母体になっているのですね。

○関根教育長 行田進修館と行田工業が隣同士でしたので、そこが一緒になって進修館に。

○上田知事 母体があって、そっち側にいかせた、吸収されるというのでしょうか、そういう形での伝統を活かしていくやつと、全く合体して違う性格の学校になっていくという、大体二通りのパターンでしょうか。

○関根教育長 大きく分けるとそういう形になると思います。

○上田知事 全く違うパターンという形でいって、特色のある形がこういう誠和福祉とか、

あるいは滑川総合なんかもそうでしょうね。普通高校が総合高校になってくる。あるいは戸田翔陽とか。

○関根教育長 はい、あと狭山緑陽とかですね。

○上田知事 今、吉田委員が言われたように、何かぴかぴかっという感じもほしいと感じますね、ぴかではなくてぴかっ。

○吉田委員 もうあそこへ行きたいという。

○上田知事 今のところは大体ぴかっぐらいはあるわけですね。ぴかぴかぴかっぐらいの感じで、今はぴかぴかかもしれません、それにもっとぴかっという感じがどっかに乗っかれば、そういうものをつくるために、こういう現場力のある、指導力のある先生たちが、将来自分がもし校長だったらとか、もし自分が教頭だったらこんな学校をつくりたい、こんな教育方針に沿った形のカリキュラムや学校づくり、校舎づくりというのですか、やはり器も必要でしょうから、教育の内容によっては、単純なマッチ箱を縦にするか横にするかだけでなく、もうちょっと工夫が必要でしょうから、そういうものを募集して、場合によってはそういうアイデアを持った人たちがぶつけ合って、1人だけの知恵ではなくて、集まってそういう意見を聞く会だとか、そういうことは可能なんですか。やったことはないでしょうけれども。

○関根教育長 どんなふうにできるかは研究してみる価値はあると思います。

○上田知事 例えば知事部局サイドでは時々やっているわけですね。部局を越えて手を挙げてもらって、わいわいがやがやと言いながら新規事業を打ち出そうと。どうしても1つの課を中心に組み立てていると、いつの間にかそういうふうな感じにみんながなくなって、案外その人たちがよその顔を眺めるといい意見が出ているのですけれども、この中ではあんまりいい考えは出ないという、よそのところはよく見えてしまうという、自分たちのところではもう固定観念が一つできあがっているでなかなか出ない。だから部局横断的にいろいろピックアップして議論させると結構いい話が出てくるというのがあるので、何らかの形でそういうのを募集したり、また、募集しただけでなくて集めて議論をしていただいて、将来もしつくるのだったらこんなものだ、そういうのも現場にいる人たちが何だといったら、ひょっとしたらぴかぴか以上のぴかっというやつが出てくるかもしれませんので、そういうのをちょっと考えたらどうでしょうか。

○藤崎委員 これはまだイメージなんですけど、もっと高校がそれぞれの地域色を生かして特色があったらいいなというのは考えていたのです。例えば和紙の文化遺産に選ばれまし

たが、高校の勉強と同時に和紙の楮を育てたり、そしてすいたり、あるいはデザインを学んだり、木工、その高校に行くと、こういったことが学べるという中で、埼玉の中でそれぞれの特色を守っていけるような学科があってもいいのではないかなと考えていました。例えば川を守るためのカリキュラムがあったりして、他県なんかを見ますと、カヌーから、ボルダリングから、いろんな川魚など、それから環境、そして科学とか、そういったものを結びつけるとか、あるいは桜並木が有名なところでは、樹木医の資格まで取るのはもちろん無理ですけども、そういったことを前提とした基礎教育ができたりとか、いろいろな何かその高校の特色を打ち出していけたらいいのではないかと考えたりします。

来年からは、アニメーションも勉強できるような私立の通信制高校が始まると聞いています。大宮中央などはかなりマンモス校となっていますが、不登校、中退などを考えると、この通信制をもう少し充実したものにしたいですね。今、進路変更がなかなかしにくい部分もあります。簡単に進路変更をすることがいいとも思いませんが、現状から考えると、そういったことを今ある学校をさらに充実させ、変えていくかということを実践できれば、高校生たちにも夢を持ってもらえるのではないかなと思ったりします。

門井委員が以前、中学生からどんな高校に行きたいかアイデアを募ったらどうか、という提案をされていました。そういったこともぜひやってみたらどうかと思います。

○上田知事 今の話も重要だと思います。進路変更なんかというのは、例えば総合高校なんかできるのですか。学科の変更というのでしょうか、コースの変更なんていうのは総合高校なんかできるのでしょうか。

○関根教育長 学校や学科、どの時点かによりますね。

○上田知事 可能なところは可能なんですね。

○関根教育長 場合によりますが、入学してから専門を選ぶという制度を採用している学校もあります。

○上田知事 できればゆるやかにシフトができるシステムなんかあったらいいかもしれませんね、たまたま今この学校にいるけれども、進路変更したいということで2年次になったらこっち側に行っているとか、違う学校に行っているとか、そんなことも可能になるともっといいかもしれませんね。浮気者がいて、あっちこっち行ってもらっても困りますけれども、渡り鳥みたいに1年おきに学校が代わるのでは困ってしまいますけれども。

○高木委員長 23ページの全日制の生徒数の関係なんですけれども、一時期から比べると約40%ぐらい落ちている。それで参考に書いてあります私立高校の生徒数は、ピークは6

万 9000 で、5万 4000 ということで、これを比べると 20%台、どちらも落ちているのですが、落ち方を比べると圧倒的に公立高校のほうが下がっているのが現実なんですね。やはりこの辺のところをちょっと考えますと、やはり私立高校の魅力が何かあるからここは落ちないのかなと思ってしまうのですね。公立高校として、例えば先ほど知事がおっしゃった伊奈学園なんかは、伊奈学園まで2時間近く通っている子供も学校訪問していくといらっしゃるのですね。やはり何か魅力があるのですね。その魅力を県内のあちこちにそういったさっき言ったぴかぴかっという学校を、それぞれ伝統校で各地区にありますけれども、そういったものを再編していく中で、ぴかぴかっという輝くものを各地区に1つだけずつつくっていくという目標を持って進んでいくというようなことをしていけないと、私立高校の人気はずっと維持するけれども、公立はどんどん離れていってしまうというような懸念を感じているのですが、これからの再編の中で、そういうものを含めて、何が魅力なのかということだと思います。先ほども萱野先生がお話になっていましたけれども、例えばフランスに行って、食文化に関しては余り語学力も要らないしという話もありますし、そういう違った分野で、例えば前、教育委員のみなさんでお寿司屋さんへ行ったことがあったのですけれども、そのとき中学生のすし職人がいて、中学生から10年間やれば一人前になれるという話があったのですが、子供から、子供というか一人前の社会人です。でもそういう食だったり、デザイナーだったりというものを特化した学校があってもいいのではないかなという気がするのですね。

ですから、この際、再編する中で、そういうぴかぴかっというものを打ち出して行って、これから変わっていくよというようなものを、先生方にもそういったものを、さっき吉田委員がおっしゃったようなアイデアをそういう形から募ってもらう、そんなものが具現化できたら素晴らしいのかなと思うのですけれども、いかがでしょうか。

○上田知事 そうですね。ただ、すし職人希望者が5人とかだったら、なかなか採算ベースが厳しいかもしれませんね、講師陣だとか、そういったのがつらいかもしれませんが、やはり現場力ですからね、すし職人なんかというのは。ただ、一般の教養を持った上で、そういうこともできるというのだったらもっといいのでしょうね。多分。また、友達もその時期にそこそこ違う友達がいるというのも大事かもしれませんね。

○高木委員長 すし職人は一例ですけれども。

○上田知事 ほかにはございませんか。

○志賀委員 例えば私の息子は中学3年生なんですけれども、同じ学年の男の子で、その

子が今度青森のほうの高校に行くことが決まったという、それは推薦だと思えるのですけれども、私立は結構野球をやっている、野球の推薦とかはすごい強いところ、甲子園に行くような学校がありますね、そういったところに夢や希望を持って、自分は勉強は苦手だけれども、これで頑張りたいと凄くこつこつ努力をして、最初、決して小学校のころから知っているのですが、そんなに上手ではなかったのですが、今はやはり努力の積み重ねで野球で自分は一番になるのだということで、今度は青森に単身で行くことが決まったそうなんです。そういうことを聞いていると、子供は目標を持つと、その学校に青森でも行きたいというわけですね。例えば公立でそういうところというのはなかなかお金もかかるし、難しい部分があるのだとは思いますが、甲子園に出れるような、そういう野球のチームを養成する学校であるとか、本当に一番を目指す学校、またさつき藤崎委員がおっしゃったみたいな、和紙、和紙だって埼玉県で小鹿野町でしたか、日本の伝統文化がすごく多いのですね、私の住む鴻巣も人形の町なんですけれども、岩槻もそうですね。埼玉は日本の伝統芸能や文化が継承されている地域がすごく多いのですね。そういったところをぎゅっとそういうものを学べる学校とか、そういう特色ある学校づくりというのをやると、子供たちはそこに結構目がいくのではないかなと感じました。

○上田知事 ユネスコの無形文化遺産になった小川の和紙技術、紙すきプラスアルファの紙すきなんか学んで地域の産業を興すという役割とかがあるいは必要かもしれませんね。そういうところに希望する人たちがどのくらいまたいらっしゃるかとか、そういう課題は持っています。それに合わせた形での、多分技師というか、非常勤講師みたいな人たちは地元の方々から集められるのでしょうけれども、それ以外の部分で、そのコースで覚える作業というのは少し困難な部分があるかもしれませんが、探る価値はあるのではないのでしょうか。そういうのも少し課題にさせていただきますか。

○関根教育長 はい。

○上田知事 採算ベースだとか、そういうのを、それを文句を言っているのは知事部局でしょうから、勝手なことを言って、あとでそんなお金はありませんよなんていう話になってきたりするかもしれませんが、でも可能性は探っているのではないかと思います。

○藤崎委員 つけ足しで、すし職人ですとか、人形をつくったり、例えば1学期間、学校にいたものの、夏休みから急に意欲がなくなってしまって、そういった子に2学期は社会経験をしておいで、あるいはすし職人を目指したいという、そういう現場に、その間はもちろん欠席で単位がとれないような状態になったとしても、また戻ってくる、やはり勉強

したいと戻ってくるような、何かそういう柔軟な高校というのはまだ日本の中にはないのではないかと思います。一部の生徒たちはやっているかもしれませんが、そういう高校の形も一つあってもいいのではないかなと思います。

○高木委員長 先ほどの話の続きなんですけれども、思い出しました。実はこれは1都9県の教育委員長協議会が山梨であったのですね。山梨の農業高校がワインをつくっているのです。そのワインをふるまってくれたのです。もちろん販売はできないのですけれども、その子供たちは山梨というとワイナリーでかなり全国的にも知名度が高い、ワイン業でこれから将来やりたいという子供たちが集まっているらしいのです。埼玉はどうなんだという、やはり秩父のワインあり、それから、埼玉は結構日本酒をつくっているところがたくさんありますね。もちろん大学に行ってそういったものの醸造課程を勉強したりするのもあるでしょうけれども、そういうところも目をちょっと高校生ぐらいに落とせるようなところがあると、日本酒のプロになるのだとか、やはり今までも、さっきから食文化ばっかり言っていますけれども、そういう子供がやりたいもののフィールドを広げてあげるということを埼玉県がやれたらなと思うのですけれども。

○上田知事 今、地場産業関係の人材を育てるという趣旨があっても、それは多分地域的には喜ばれる話だとは思いますが、地域的には。

○関根教育長 だんだんと人口が減っていくという時代の中で、地域の再生ということと、学校教育というものは、一緒に取り組んでいく必要があると思うのです。そういうことは模索していく必要があるのではないかと私も感じております。

ただ、いわゆる公立の高校がどういう役目を果たすべきなのかということは、やはりきちんと押さえながら、そういう中で公立の高校と地元と一緒に何かできるのであれば、一緒にやっていくべきだと思います。ただし、先ほどの野球だとなってくると、公立で野球選手を集めてというのはなかなか厳しいかもしれませんね。いわゆる学校教育の中においては、そういうことがメインではないので、それはちょっと厳しいかもしれません。ですが、地元と一緒にやっていくことは、様々な教育の在り方が考えられる中で、それは公立の学校でやっていくということでは考えられるかな、などとその辺の線引きをしながら考えることになるでしょうね。最終的には、知事が先程おっしゃってくれたのですけれども、財政という問題があります。労働生産人口が減っていく中で、学校の施設設備も維持管理も厳しいという中で、どういう手を打てるか。しかも魅力ある学校をつくっていかないと、やはり私学さんにどんどん奪われてしまっただけでは、公立学校としていかなものかと思われ

ます。その辺のバランスの考え方について、またいろいろな御意見をいただければと思います。

○上田知事 あと農業分野に関しての技術取得なんかでは、県立の農業大学校、高卒以上の方々を受け入れる形ですが、ああいったところなんかは受け皿としてはありますね。そこで地場産業関係の人材を少し受け止めていく。木質化をやったもので、抜群に人気が出て、応募がかなり関東近県からも含めて多いそうです。やはり器が立派になったので魅力が出たみたいですね。だから器もそれはそれで魅力が出たみたいですね。完全に木質でかなり立派なものです。

それでは、再編成についての意見を皆さんから承った形の中での集約化をまた事務レベルでやっていただきたいと思います。

○関根教育長 はい。

○上田知事 次にページ数は 28 ページですが、グローバル人材育成基金の中身と、またそれを使っての海外留学の促進について意見を述べていただければと思っております。

帰ってきた人たちから意見を聞いていると、非常に皆さん感激され、また機会があればこれに限らずいろんな形でまた留学したいとか、そういう意見が圧倒的ですね。仕事の中でも生かしたいとかという、今のところは何かむちゃくちゃ欠陥があるという話は聞かないですね、事務レベルで何かそういう話は聞いていますか。

○関根教育長 問題があるということは聞いていません。やはり行ってきた人たちは非常に行ってよかった。そういう話はよく伺います。

○上田知事 プログラムのコースと申すのでしょうか、それについてはどうなんでしょうか、枠だとか、そういったものについての意見というのは出てきているのですか、対外的に。

○関根教育長 正式な報告を受けたというわけではないのですが、私が知っている例ですと、こういう基金があったので行けたという生徒がいた話は伺っております。

○上田知事 レベルでは数というのでしょうか、中身についてはまたなかなか比較対照がしにくいので難しいところですが、数だけだったら日本一という形になっておるところです。ただ、比較的ほかのところも増やしてきた経緯があります。どんどん減らしていたのです。一貫してこういう類のものを。それで思い切って、これではまずいなと私も思ったので、こういうことを考えて制度化をしたら、結果的には他の県などもやはりお金がない時代ですけれども、追随されている傾向が出てきているみたいですね。

もう時間が、今日の部分に関してはあと 5 分しかないそうです。

もう1本進めるにはちょっと厳しいかもしれませんね。それでは、最初のグローバル基金に関して、余り時間はございませんが。

○吉田委員 グローバル人材ということで、海外へ派遣する事業ということで、そういうふうなことになるのですけれども、一部の生徒さんだけがということではなしに、その後高校にいるときでなくても、いつでも海外に、海外ばかりでなくて目を向けられるような裾野を広げるようなということを、今日たまたま萱野先生のお話の中にあつたアウトプットを意識するというようなことを、難しいかもしれないけれども、そういったことをこのグローバル人材の育成という中できちんと押さえていくということが大事なかなと思うのですね。

○上田知事 その部分では、東京から近い利点を生かして、これは県民生活部なんかではアジアプロジェクトなどを展開しているところですが、アジアの国々の大使の皆さんたちを呼んだりしながら、向こうは我が国に投資をしてくれということで、埼玉の経済人の皆さんたちを中心にセミナーを開いてくれるのです。私たちはそれだけではもったいないもので、ついでに高校で話をしてくれということで、先般、和光国際高校に行ってもらったのはメキシコの大使でこちらで昼食をされて、和光国際高校で御講演をいただいたのです。そういう形でときどきついでにと言ったら言葉が語弊があるのですけれども、大使の方々などに、各高校なんかで御講演をいただいて、ある意味ではそういう意味での裾野を広げるといえるのですか、やはり向こうから見た日本、あるいは日本がどうメキシコならメキシコを見ているかだとか、世界から、また大使もあちこち回っていらっしゃいますので、相対的に日本を見る力とかを持っておられますので、そういった日本感覚なんかをお話していただけることで、視野を広げるチャンスをお子さんたちというか、生徒たちも思うのではないかなと思っていますので、そういうことは結構やって

いるのではないのでしょうか。このくらいの感じはどうなのでしょう、他の県なんかと比べて、こういう大使の皆さんなどにずっとお願いしてやっているのではないですか。大した謝礼を出さずにおみやげ程度で、こういうのはどうなのでしょう。

○関根教育長 私も他県の状況は何ってないのでわからないのですが。

○上田知事 少なくとも埼玉はメリットがあるものね。近いもので、ちょっとという感じでおいでいただけるというメリットがあるもので、各大使の皆さんも、大使館の皆さんたちも、単に東京で終わらずに地方も見たいという気持ちを持っておられますので、双方のニーズ、それから、地方の投資もやはりしていただきたい、そういう希望があります

ので、埼玉あたりで企業者を集めて講演の機会をつくったりすると、それはそれで相当喜ばれるところがあります。お返しにちょっとという形で、これもある程度行っていただくところは決まっているのですか、学校は。

○関根教育長 向こうからの要望があったり、学校からの要望を橋渡ししたり、ということはありません。先日、アメリカの大使館の方に来ていただいて高校生に話をさせていただきましたが、それはグローバル人材育成のプログラムの一環としてお招きしたものでした。また時には、大使館側からこのあたりの高校に行きたい、ということもあるようでございますので、そういうことを利用して来ていただくことはあるようです。

○上田知事 あと学位取得コースのメンバーなんかに少し話をしてもらおうというのいいかもしれませんね、大学4年生、あるいは卒業されて、場合によっては就職しているかもしれませんが、どんな形でそれが生きたとかというのをもしチャンスがあれば、学校の休みと職場の休みというのが一致するかどうかわかりませんが、向こうの休みがこっち側がちょうど授業中というのが一番望ましいと思いますけれども、そういうのがあれば、そっちの方法なんかも裾野を広げるのではないのでしょうかね。

○吉田委員 一步踏み出す勇気につながっていくかもしれませんね。

○上田知事 身近な人から言われれば、より現実味がありますね。

それでは、時間になりました。グローバル人材育成基金の部分、あるいはまた海外留学の促進の部分については、萱野先生の話もまた参考にしながらですが、事務的にはとりまとめをお願いしたいと思います。

それでは、今日の教育会議は2分野について議論をさせていただきましたので、次回は残り全部をさせていただきたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。

本日はありがとうございました。

○関根教育長 知事ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして、第3回埼玉県総合教育会議を閉会といたします。

どうもありがとうございます。

閉 会